

平和の思想とジェンダー
日常の文化として平和を考えるために

岩谷良恵
東京学芸大学大学院連合
博士課程（千葉大学）

平和について考えるとき、一般には、戦争をめぐる直接的な暴力としてイメージする傾向にある。しかし、1960年代末から、そのような傾向とは全く違う平和の概念が現われる。ヨハン・ガルトゥングによる「構造的暴力 structural violence」、すなわち、たとえ直接的な暴力がふるわれなくとも、社会における差別構造が生み出す間接的な暴力を含めた暴力全体があれば平和とはいえず、それをなくすことこそが「積極的平和」であるとする概念である（ヨハン・ガルトゥング＋藤田明史編著『ガルトゥング平和学入門』法律文化社 2003年、117-118 ページ）。

また、直接的暴力でもあり「構造的暴力」でもある「女性に対する暴力 Violence against Women」という概念も生まれる。1980年代まで「女性に対する暴力」は多くの国々で私的な空間の問題とされ、公的な問題や政策課題とはなりにくかったが、1990年代になると、それは女性に対する人権侵害であり、また平和への侵害であるともいう認識が広まっていた（伊藤るり「ジェンダーの視点に立った〈平和〉概念の再構築—〈女性に対する暴力〉をめぐって」日本平和学会『平和研究』第26号、2001年11月、68-69 ページ）。

そして、こういった女性に対する暴力につながる性差別主義こそが戦争システムを支えているという点は、戦争もなく、また、日常の構造的暴力のない平和を考える際に、非常に重要な視点であろう（ベティ・リアドン『性差別主義と戦争システム』勁草書房 1988年）。それはさらに、小田実の言うように、やむをえない場合には暴力・武力を使ってもよいという「戦争主義」をどう乗り越えるのかということ、軍事化そのものを否定する「平和主義」の創造ともつながるのではないだろうか（小田実『戦争か平和か「9月11日」以後の世界を考える』大月書店 2002年）。

このような概念を踏まえつつ、本報告では、直接的な暴力の不在という消極的なものでなく、積極的な平和を考えるために、概念のみではなく、今後の日常の文化として、どのような条件が必要なのかについて、提起したい。

歴史的な一例としていえば、女性であれば暴力や戦争をやめさせることができるとはいえないが、母系制社会では戦争がなかったという指摘がある（若桑みどり『戦争とジェンダー 戦争を起こす男性同盟と平和を創るジェンダー理論』大月書店 2005年）。そういった先行研究等も参考にしながら、現在の日本の社会構造と日常の文化において、どんな条件があれば積極的平和を考えられるのかを、模索したい。

できるだけ多くの方々と多様な話し合いができるのを期待している。